

といつて、自分の兵に腰刀を捨てさせ、弓絃を切らせた。この態度を河越しに見た忍熊皇子も疑ひがはれたとみえて、同じく兵士たちの武器をすべて河のなかに投げ捨てさせた。かくと見た宿禰はすぐに味方に渡河を命じた。皇軍は河を渡りながら、背中の刀剣を腰につけ、髪のかなの絃を弓に張つて皇子軍を攻め、つひにそれをほろぼしてしまつた。

かうして應神天皇が御位に即きたまふと、またもや命を奉じた宿禰は、筑紫方面の地勢や民情の巡視にでかけた。その留守中に、弟の美内宿禰は、兄を讒言して、筑紫に行つた兄は、三韓と連絡をとつて、天皇にそむきたてまつらうとしてをります。

と申上げたため、天皇は使者をつかはして、宿禰を殺させようとなされた。それと知つた宿禰が「自分はいつも皇室の御爲めに御奉公申上げてゐるのに、いつたいどうしたことだらうか。」と、天を仰いで嘆息すると、傍にゐた眞根子といふ家來が、「そんな弱い心でどうなります。幸ひ私の様子がわが君に似てゐますので、私が御身代りに立ちます。わが君はどうか天皇に拜調を請はれ、無實の罪の一部始終を奏上したのちに、なほお疑ひがはれなければ、そのとき死なれても遅くはあります。」

と勧め、そのまま自殺してしまつた。身代りに立つた眞根子の心情もあはれんで、宿禰はひそかにその場を立ち退き、海路から大和に出て、天皇に真相を申上げた。それで天皇は、二人の兄弟を御前に召し、なほ詳しく事情を取調べたまふと、甘美宿禰はつつみきれずに、一切の罪を白状して罰を待つた。怒りに燃えた宿禰が、弟を殺さうとしたのを、天皇はとどめたまひ、甘美宿禰は奴隸となつて、この世に生き残ることを許された。宿禰は景行、成務、仲哀、應神、仁徳の五朝に歴任し、二百四十四年も官に在り、仁徳天皇の五十五年にこの世を去つた。わが國において最も長く生きてゐた人物である。

平群木兔宿禰

武内宿禰の子で、仁徳天皇と同じ日に誕生した。そのとき、天皇の御産室にはみみづくが飛んで入り、宿禰の産室には鶴鶴がまひこんだため、應神天皇の勅命によつて、皇子は大鶴鶴命、宿禰は木兔宿禰と、名を易へてつけた。

さきに天皇は、やはり武内宿禰の子にあたる葛城長江襲津彦を加羅國につかはして、弓月の人

人を召させられたことがあつた。ところが新羅がそれを無理にとどめて、三年間も歸さなかつたので應神天皇の十六年に、木兎宿禰と戸田宿禰とに命じて、新羅を討たしめたまふた。二人は精銳な皇軍を率ゐて、その國境まで進むと、新羅の態度はたちまちにかはり、今までの罪を謝して降参した。それで、二人は、襲津彦をたすけて、弓月の人人を引連れて、無事に凱旋した。また、住吉仲皇子が朝廷にそむいたとき、宿禰は、履中天皇を奉じてあやふい場合をのがれたのち、反正天皇にしたがつて難波に出て、刺領巾といふ皇子の家來を利で誘ひ、仲皇子を殺させた。さうしておいて反正天皇の御前に進み、

「あの刺領巾といふ男は、功勞はありましたものの、利益のためには現在の主人をも殺しました。さうした人物は、今後のみせしめに生かしては置けません。」と、刺領巾を殺してしまつた。そののち、履中天皇の御代に、國政に直接參與する身となり、百二十八歳で薨じた。

田道

父は豊城入彦命の四世の孫にあたる荒田別命といひ、應神天皇の御代に、たびたび新羅を討つて勳功をたてた人であつた。

仁徳天皇の五十三年になると、新羅がまた貢物をおこたつた。天皇は田道の兄にあたる竹葉瀬をつかはして、新羅を伐たしめたまふと、竹葉瀬はその途中で白い鹿を得たといつて、軍をかへして獻上した。そこで今度は弟の田道を遠征させることになり、出發にあつて、

「新羅が命令にしたがはねば、遠慮なく武力に訴へよ。」と命ぜられた。

この大御言があつた。はたして新羅は、はじめから戦を挑み、少しも反省する様子さへ見せなかつた。田道は城壘を固く守つて出ず、その間に敵の捕虜を引出して、軍の配置をたづねた。

「右軍の先頭に百衝といふ大將が指揮してゐますが、この大將は智勇ともに優れてゐますので、なかなか破れません。左軍にはそれほどの人物がゐりませんので左軍を攻撃すれば勝てませう。」かう答へたとほりに實行して、田道の軍は、徹底的に新羅軍を撃破した。

そののち、五十五年になると、田道は蝦夷征伐を命ぜられ、伊寺水門で戦死した。蝦夷軍はやがて進んで田道の墓をあばくと、墓のなかから一匹の大蛇が突然躍り出て、目をいからせて蝦夷

人をかみ殺し、その傍にゐた多くの蝦夷人も全部毒にあたつて死んでしまつた。田道は戦死したが、毒をよく討つた。」
と、時の人の語り草になつたといふ。

大伴連室屋

道臣命七世の孫にあたる。祖父の武日命は、景行天皇の御代に日本武尊にしたがつて蝦夷征伐に功勞があつた。父の武以は、仲哀天皇元年に、わが國最初の大連となり、天皇のお供をして熊襲征伐にしたがつたが、天皇が崩せられると、皇后の命をうけて宮城を守護した。

雄略天皇が御即位あらせられると、室屋は父の職を繼いで大連となつた。やがて天皇が御危篤に陥られると、室屋と東漢掬直との二人を御身近くに召したまうて、皇太子の補佐について親しく御遺言あらせられた。間もなく星川皇子がそむいたので、室屋は掬直にむかひ、「今こそ御遺言どほり、身命をなげうつて御率公しなければならぬ。」

と、共に皇太子の御味方を申上げて星川皇子をほろぼした。

また、室屋の忠勤を嘉せられた雄略天皇は、あるとき、御秘藏の弓矢を賜はつた。室屋は聖恩に感泣しつつも、
「宮中の御門を護衛するのは、重大な責任でございます。私一人では行ひきれません。左右の御門の責任を分ち、私と私の子の談とがおのおの衛りたいと存じます。」
と奏上して勅許を得た。これからその子孫の大伴氏と佐伯氏とが、左右の御門を分擔して警衛することとなつた。

彼には談のほか、御物宿禰といふ子もあつた。談は、雄略天皇の九年に、勅を奉じて、紀小弓と新羅を討つて、名譽の戦死をとげた。その家來の大伴津麻呂は、激戦中に主人の姿を見失つてから諸方をたづね、やがて主人の戦死したことを知ると、勇氣をふるひ起して大聲をあげ、

「主人を失つた以上、この世に生きてゐる甲斐はない。」
と、敵中に突き進み、勇ましい戦死をとげた。この談の子が大伴金村である。

大伴金村

大伴室屋の孫で、仁賢天皇の御代から出仕した。天皇が崩じたまうて、皇太子がまだ御即位にならぬ間に乘じて、大臣職にあつた平群眞鳥がひそかに皇位をねらつた。その子の鮪が、ある事から皇太子に罪を得たため、金村はまづ鮪を殺し、つぎに眞鳥の邸宅かこんで火をはなつてほろぼしてから、皇太子を御位に即けたてまつた。これが武烈天皇であらせられる。天皇は金村の勳功にむくゆるため、大連の職を賜はつた。やがて天皇は崩御ましましたが、御世繼の君があらせられなかつた。そこで金村が中心となつて建議して、丹波にゐた倭彦王を迎へようとしたところが、王は大勢の朝臣の姿を見て、恐れをのいて對面しなかつた。金村は第二の手段として三國にゐられた男大迹王を迎へて、御即位のはこびにした。これが繼體天皇であらせられ、天皇は金村の奏請によつて、手白香皇女を皇后に立てまふた。安閑天皇の御代となつて、三島に行幸あらせられたとき、天皇は金村に命じて、飯粒といふ縣主に良田を問はしめられた。飯粒はすぐさま四十町の良田を献上したのみでなく、その子の鳥樹を金村の下男とさせた。

それから欽明天皇の元年になると、新羅征伐についての御前會議が開かれた。席上、物部尾與は金村を罵つて、

「さきに百濟の請ひをいれて任那の四縣を與へたのは金村の仕業で、それが原因となり、今度新羅がそむいたのでございます。」

と申上げた。金村は今更のやうに自分の失敗を後悔して、そのちは病氣を口實に出仕しなかつた。しかも天皇は優渥なお言葉を賜はり、その責任を問ふことをされなかつた。彼は仁賢、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明の五朝に仕へ、磐、狹手彦、阿被布古といふ三人の子があつた。

大伴 狹手彦

宣化天皇二年に新羅が任那を侵したとき、大伴金村は勅を承けて、磐と狹手彦の兄弟をつかはして、任那を授けたことがあつた。兄の磐は筑紫にとどまつてその地方を治め、弟の狹手彦だけ遠征して任那を鎮め、新羅を討ち、百濟を救つた。欽明天皇の二十三年になると、彼は數萬の大軍を率ゐて高麗を征伐し、いろいろな寶物を得て、大部分は皇室に献上申上げ、一部分を蘇我稻

目に贈つた。この兩度の外征で、彼の名は常勝將軍として四方にとどろいた。第一の遠征の際、彼の乗つた船が肥前の港を出ようとしたとき、その妾の松浦佐用比賣は、高い丘に登つて船が見えなくなるまで彼を戀ひ慕ひ、はては領中を振つて、振りながら石となつたと傳へられてゐる。土地の人は彼女の心中に同情して、その山を領中磨嶺と名づけた。

物部連目

物部十市根の子孫である。曾祖の贈咋といふ人は、仲哀天皇のときに大夫となり、天皇にしたがつて熊襲征伐に従軍したが、天皇が崩御されましたのちは、皇后の命を奉じて、宮殿を守護してゐた。祖父を五十琴、父を伊宮弗といひ、伊宮弗は、履中天皇の御代に宮廷に奉仕した。

雄略天皇が御即位あらせられると、目は大連となつた。ときに齒田根命といふものがあつて山邊小島子といふ采女（諸國から召出されて宮中に奉仕する女官）と秘かに通じたため、天皇は目に勅して取調べさせまふと、一切の事實を白狀して、太刀八振、馬八頭を差出して自分の犯した罪を贖ひたいと請ひ、

山邊の小島子ゆゑに人ねらふ馬のやつげは惜しけくもなし

と歌つた。これを目から聞召した天皇は齒田根命の風流心を賞でたまうて罪を許されたといふ。皇同じく十八年になると、伊勢に朝日郎といふ賊があることが天聽に達し、目は物部菟代宿禰と共に征伐に向つた。朝日郎は弓の名手で、鎧を二重ねとしても貫くほどの腕前があつたため、伊賀の青墓といふ地でそれを接近したものの、菟代は畏れをなして進まず、二日といふものは對陣したままで空しく時を過してしまつた。目はそれを残念がり、家來に盾を持たせ、自分は太刀を手にして並んで進むと、朝日郎の射た一矢は、盾を通し、鎧をつらぬき、家來の身體に突きささつた。家來はそれでも必死の勇をふるつて目を助け、なほも前進して、目は郎日部を斬り殺すことができた。けれども、菟代は自分の躊躇してゐたことを隠さうと思ひ、いつまでたつても戦捷を報告しない。天皇は不思議に思はれて、「彼はなぜ復命しないのか。」

と侍臣に問はれ、凡てが明らかになると、菟代の土地を奪つて目に賜はつた。この目の孫が尾

奥である。

物部尾輿

「いつの間にか自分の大事にしてゐた頸飾りが見えなくなつたので、物部尾輿はいろいろに手を盡して探すと、麻城部部積菖諭の女幡媛が盗んで、春日皇后に献上したといふ事實がはつきりしてきた。それで積菖諭は幡媛を采女に差出し、自分の領地を獻じて罪を贖つたが、尾輿もわが所有物からこんな事になつたと考へると心が安ならず、やはり領地と人民とを獻じて責任のがれとした。これは安閑天皇元年のことであつた。翌年九月に、難波に行幸あつた天皇は、群臣を召したまうて、
 「近頃、新羅はまたもや皇威をないがしろにするらしいが、どれほどの兵を遣して伐つたらばよからうか。」
 とのたまはれた。このとき、尾輿は席を進め、

「少数の兵力で攻めたならば、かへつて御味方に不利益でございます。むかし、繼體天皇の御代に、百済がわが國に使を出して、任那の四縣を請ふたことがあり、ときの大連大伴金村がすぐに許可しました。それで新羅は非常にわが國を恨んでをりますので、現在輕輕しく征伐できると思ふと大變な間違ひでございます。」

と申上げた。天皇もその意見にしたがひたまうて新羅征伐を一時見合せることに決定された。やがて十三年となると、百済王は、金銅の佛像と經論を獻上して、さかんにその功德をほめたへた。天皇はそこで、御前會議を開きたまひ、佛像に禮拜してよいものかどうかについての意見を求められた。すると、大臣の蘇我稻目は、
 「私は禮拜して差支ないと存じます。」
 と奏上し、尾輿と中臣鎌子とは激しくそれに反對した。その結果、

「禮拜の希望あるものだけは許さう。」
 といふことになり、佛像を稻目に賜はつたけれども、間もなく悪病が流行して諸國におびただしく死者ができたので、尾輿、鎌子の兩人は勅許を得て佛像を難波の堀江に捨て、寺寺をも焼い

てしまつた。

物部連麤鹿火

物部伊葛弗四世の孫で、父を麻佐良といつた。

繼體天皇六年に、百濟が使者をわが國につかはして、任那に屬する四縣を請ふたことがあつた。ときに朝廷で大勢力のあつた大伴金村が斡旋したため、天皇もそれを許したまひ、麤鹿火が勅使となつて、百濟の使者のゐる難波宮に行くことになつた。それを知つた麤鹿火の妻は夫にむかつて「高麗、新羅、任那の國國は、そのむかし、住吉神が應神天皇に賜はつたものであります。その故に神功皇后は武内宿禰と御相談あらせられて、海外の領地となさいましたのを、今となつて削り去つたならば、永久に非難されねばなりませんまい。」

と諫言した。

「おまへは正しい道理をいふ。が、勅命であるのをどうしよう。」「うまの大伴大伴金村は、病氣を口實にして御辭退なさいませ。」

「それはよいところに氣がついた。」

と、彼はそのとほりにした。そこで新しく勅使が任命されて、皇都を出發すると、ときにまだ皇子にしました安閑天皇は、日鷹吉子といふものに命じて勅使を追ひ、連れもどされた。

また、天皇の二十一年に、近江毛野は勅命をうけ、新羅に侵された土地を回復するために任那に赴かうとした。しかもそのとき、筑紫の國造となつてゐた磐井といふものが、新羅の賄賂をうけて、故意に妨害したので、毛野の軍は九州から一歩も進めなくなつてしまつた。天皇は重臣會議にはかられた結果、麤鹿火を派遣することに決定したまひ、彼を召して、

「長門以東は朕が征しよう。筑紫以西は卿が征せよ。」

との勅をたまはつた。聖恩に感泣しつつ、彼は、翌年十一月に磐井と筑紫の御井郡に戦ひ、それを全滅した。

紀小弓宿禰

雄略天皇九年に、紀小弓宿禰は、蘇我韓子、大伴談、小鹿火宿禰らと共に、新羅に遠征するこ

となつた。出發の數日前になると、小弓は大伴室屋の邸に出向き、
「微力ながら私は一死御奉公の覺悟を定めてゐます。ただ、最近妻をうしなひまして、日常不自由してをりますことを陛下に奏上してください。」

といつた。室屋からこれを聞召された天皇は、小弓に御同情のあまり、大海といふ采女を賜ふた。

さて、聖恩に感激して勇氣百倍した小弓は、敵を撃破しつつ、新羅國王の居城めがけて猛進した。國王は日本軍の迫つたのを知ると、わづかに數百騎を率ゐて夜の間に城を逃げ出した。が、それでも頑強に城を死守する一隊があつたので、わが軍ははげしく攻撃を加へ敵を退けたもののこの合戦で談は戦死し、小弓も病歿してしまつた。妻の大海は、夫の屍を守つて歸國のち大伴室屋を通じて、その墓地のことを奏請した。天皇は優渥なお言葉と共に墓地をも賜はつたので、彼女はこのうへもなく喜び、立派に夫を葬つたといふ。

紀大磐

紀小弓の子大磐は、父の戦死を聞くとすぐに新羅におもむき、小鹿火宿禰の權利を奪つて、自分が指揮官となつてしまつた。小鹿火はそれを殘念がり、蘇我韓子にむかつて、

「あの大磐は、あなたの權利をも奪つてみせると、私の前で斷言しました。御用心に越したことはありません。」

と、中傷した。韓子もさすがさう聞かされて、よい氣持はしなかつた。かうして、日本から遠征した將軍たちの仲がうまく行かないと知つた百濟王は、諸將の和解をはかる目算で、景色の好い地方に一同を招待した。將軍らは打ち揃つて之に應じ出張することに、國境附近のある河を渡つたとき、大磐は乗馬に河水を飲ませた。その後姿を目がけて韓子はすばやく矢を放つと、わづかに矢は大磐の身をかすつて馬の鞍にはつしとあたつた。驚いてふりむきさまに大磐は強弓を射て、韓子を河のなかに射落したため、一同は興さめて途中から歸つてしまつた。小鹿火が、
「こんな亂暴な男と共に奉公はできぬ。」
と、韓子の屍を護つて歸國したのは、大磐は現地の最高指揮官となつた。

御代がかはつて顯宗天皇の三年となると、大磐は朝鮮王となる野心を起し、高麗と通じて、任那を本據地にしながら、百濟に挑戦した。そのため百濟王は非常に憤り、一國を傾けて大磐の築いた城を取巻いて食糧攻めとした。はじめのうちは、大磐はたびたび城を出て戦つたが、次第に食糧に不足するやうになると、さすがの彼もその野心が遂げられぬのをさとり、つひに歸國してしまつた。それからの彼の行動を誰も知るものはなかつた。

近江毛野臣 新羅が任那の土地を奪つたといふので、繼體天皇二十一年に、近江毛野に勅命がくだり、毛野は六萬の大軍を率ゐて遠征の途に上ることとなつた。ところが、新羅では、日本軍がはるばる海を渡つて來るといふ事實を知り、ひそかに筑紫の國造である磐井に賄路をおくつて、それを妨害させた。もともと磐井は朝廷にそむかうと考へてゐたところなので、渡りに舟と承諾して、北九州一面に部下を配置して海路を斷つたうへ、毛野の軍を押しとどめて、

「むかしは一つ釜で食事をした間柄であるのに、勅使になつたからとて挨拶もせぬのは何事だ。」

とののしり、兩軍はそこで激しく戦つた。この事が朝廷のお耳に入ると、天皇は物部麤火をつかはして、磐井を討たしめたまふた。麤火はよく進み、よく戦ひ、たちまちそれをぼろぼろしてしまつた。

そこで毛野は海を越えて朝鮮の地を踏んだが、もともと政治的な才能に缺けてゐたと見えて新羅、百濟の兩國を和解させることができず、つひに兩國軍に攻められて苦戦を続け、勅によつて歸國する途中、對馬で病死した。

紀男麻呂宿禰

欽明天皇二十三年に、新羅が任那を侵したとき、紀男麻呂は大將軍となり、副將河邊臣瓊岳と共に遠征して朝鮮の地に上陸し、新羅にむかつて任那を攻めた理由を詰問することになつた。部將調吉士伊企儼らは軍を進めて任那に行き、百濟と連合して新羅を攻める策戦をとつたが、その使者の手落から、新羅に策戦が漏れ、使者は降参してしまつた。男麻呂はそこで軍を引いて百濟の陣中に入り、自身連絡をとつたので、新羅もこの形勢を見て、冬になると、わが國に貢物をお

くり、機嫌をとつた。
かうして、無事大任を果して歸朝した男麻呂は、用明天皇が崩御ましますと、蘇我馬子にしたがつて物部守屋を攻めたが、崇峻天皇四年になると、巨勢臣比良夫と共に大將軍となり、ふたたび任那問題で新羅を討たうとして筑紫まで出陣した。

阿部臣比羅夫

崇峻天皇二年に、阿部比羅夫は勅命を奉じて、北陸道の諸國境を巡視した。齊明天皇の御代になると、越守に任ぜられて、その四年には一百八十艘の海軍を指揮して蝦夷を討つた。比羅夫の剛勇に驚天した蝦夷は、やがて降参したので、彼は淳代と津輕とに官吏を置いて、北海道の蝦夷たちをも集めて大酒宴を張り、皇威の廣大さを示したのち、進んで肅慎(滿洲族の一部)をも討つて、生きた熊二頭と熊の皮七十張とを朝廷に献上した。

翌五年に彼は、また肅慎まで遠征し、六年には、三たび肅慎を討つて無事凱旋、やがて天智天皇の御代になると、新羅に備へるために、筑紫の太宰帥に任ぜられた。

葛城圓大使主

玉田宿禰の子で、履中天皇の御代には、平群木兎、蘇我滿智、物部伊弉弗と共に、朝臣のなかで最高の地位を占めてゐた。彼が大臣のときに、安康天皇が眉輪王に弑せられるといふ大事件が起つた。眉輪王は天皇を弑したてまつると、境黑彦皇子と一緒に彼の邸宅にかくれてゐたので、非常に御逆鱗あらせられた雄略天皇は、

「眉輪王は大逆を犯した人物である。一刻も早く役人に差出せ。」

と、彼に嚴命されたまふた。が、

「むかしから、人臣がある場合に皇族のお方にかくまはれることはあつても、皇族が家來の家に匿れた例はございません。その例のないことが私の家に起りました。家來の身としてお縄をかけることはできません。」

と、圓が拒絶したため、天皇の軍隊はすぐさま、その邸を取巻いてしまつた。
もともと彼は眉輪王に同情してゐたので、どうかして助命の御沙汰を得たく考へ、こちらか

ら門を開いて御前に進み、「たとへ私の生命を召されても、眉輪王だけは御助命ありたいものでございます。私の娘韓媛と私の領地とを献上いたしますから、どうか御仁慈の程をお願い申し上げます。」

と、大地に頭をすりつけて奏上した。けれども天皇はお許しにならず、彼の邸宅を焼かせたので、彼は皇子、王たちと共にその場で焼死してしまつた。

平群臣眞鳥

平群木兔の子であつた。雄略天皇が御即位あらせられると大臣となり、そのち清寧、顯宗、仁賢の三朝に歴任した。仁賢天皇が崩ぜられて、皇太子がまだ御即位になりたまはないとき、彼は皇太子の御殿を造るといふ口實で、立派な邸宅を建て、そのなかに自分が住んで贅澤な生活を續けてゐた。

當時、物部麤鹿火の娘に影媛といふ絶世の美人がゐた。皇太子はそれを召されようとされたが影媛は眞鳥の子鮪と通じてゐて、それに應じなかつた。

「父といひ子といひ、言語道斷の振舞である。」

と、太子は大いに憤りたまひ、すぐに大伴金村に命じて、眞鳥一家に追手を差向けられた。金村は數千の兵を率ゐて鮪を捕へて殺し、眞鳥の邸を取巻いて、それを焼き殺してしまつた。この皇太子が、のちの武烈天皇であらせられる。

蘇我稻目宿禰

蘇我石川宿禰四世の孫にあたり、祖父を韓子、父を高麗といつた。

稻目は、宣化天皇元年に大臣となつた。欽明天皇の御代に、百濟王が金銅の佛像を献上すると天皇はそれを禮拜なされたい思召から、御前會議を開かれた結果、佛像を稻目に賜はつた。そこで彼は小墾田にある邸宅にそれを安置して日毎に拜禮したのみでなく、向原の邸宅を寺院に改造して、人人にも佛教の尊い理由を説いた。わが國でこれが寺院のはじまりである。

やはり欽明天皇の御代のこと、百濟王が新羅に攻め殺されてしまつた。王子の餘昌は弟の恵をはるばるとわが國につかはして、事情を奏上させると、天皇はことごとく御同情ましまし、許勢

臣を通じて、（中略）「王子は日本にとどまりたいのか。」と問はせられた。

「出来ませぬならば、貴國の軍隊をおかり申して、父の仇を報ひたく存じます。」

「百濟王は、人格といひ徳といひ申し分のない御方であられたのに、主かうした災難に逢はれてしまった。これは何の咎であらうか。そして王子は、今後どんな方針で國家を鎮めようとされるのか。」

と問ふた。それに答へて恵は、
「私にはさうした深い理窟や大きな問題はわかりません。」

といふと、稻目は、
「むかし、わが雄略天皇の御代に、貴國は高麗のためにほとんどほろぼされようとしたことがある。天皇はそこで、わが國の神を祭らせて國難を除きたまふたのに、近頃貴國ではそれをまつ

たく怠つてゐると聞いてゐる。今後はこれに懲りて、十分に日本の神を祭れば、國家はかならず安穩とならう。」

と、諄々と説くところがあつた。

物部弓削連守屋

物部尾輿の子で、父のあとを繼いで大連となつた。

敏達天皇の御代になると、佛教がだんだんと世に行はれたが、當時、佛教崇拜の中心人物は大蘇我馬子であつた。守屋はそれを不満に思つて、機會あるたびごとに國家を毒する佛教を國外にしりぞけたいと望んでゐた。たまたま、十四年になると、悪病が流行して病死するものが多かつたから、守屋は天皇のお許しを得て、馬子の建てた寺を殿ち、佛像を焼いて、その灰を難波の堀江に乗せてしまつた。いふまでもなく、馬子が佛教を崇拜した結果、日本の神神が怒りたまひ悪病を流行させたと奏上したのである。馬子はくやし涙を出しながら、つねづね下にも置かず崇んでゐた三人の尼をも、役人の前に差出さなければならなかつた。

はじめ敏達天皇が崩ぜられて、まだ皇嗣が定まらぬとき、馬子は炊屋姫皇后と御相談申上げて皇后のお腹から出た大兄皇子を立てようとした。しかも守屋は大兄皇子の弟君にあたる穴穂部皇子を立てたく考へ、皇子もまた御即位の希望を持つてゐられた。皇后と馬子とは、守屋の考へに關係なく、大兄皇子を立てたてまつり、穴穂部皇子は、そのため非常に御失望あらせられた。かうして立ちたまふた用明天皇が、間もなく崩ぜられると、ふたたび皇嗣問題が表面化して、守屋はあくまで穴穂部皇子を、馬子は泊瀬部皇子（のちの崇峻天皇）をそれぞれ擁立しようとした。双方ともに、全く感情的となつて、意地でも自分の擁立せんとするお方を天位に即けたいとあらゆる方面に運動をはじめたが、穴穂部皇子と守屋とは、今度失敗を重ねたならば大變だと、狩を口實に大勢の人間を集め、そのまま馬子の邸宅に攻めよせる計畫をたてた。けれども、この計畫が馬子の耳に漏れると、機敏な馬子は兵をつかはして皇子を弑させ、そのまま諸將と共に守屋の邸宅を急襲した。不意をつかれた守屋は、十分の戦備もなく、守屋自身、樹の上からさんざんに弓を放つてしばらくは防戦したものの、聖德太子その他の新手が馬子方には加はり、つひに迹見赤檮といふ弓の上手に射殺されてしまった。

捕鳥部萬

物部守屋に捕鳥部萬といふ家來がゐた。馬子が守屋を攻めたときには、一百人の部隊長となつて難波の邸宅を守つてゐたが、守屋が戦死したのを聞くと、夜に乗じてその場をのがれ、茅渚有眞香邑に行つて、その妻と別居、山の中に隠れてしまつた。そこで朝廷では、萬を見つけ次第、捕へて殺さうといふ議が一決した。

馬子の家來たちは、萬の隠れた山に入つて、諸所を探し出した。すると、そのなかの一人が、乞食のやうな姿をして、手に弓を、腰に太刀を帯びてゐる萬を發見したといふので、すぐさま數百人でそのまはりを取巻いた。くさむらに身を忍ばせた萬は、縄で竹を繋ぎ、それをゆすり動かして、巧みに捕手の目をくらませながら、一本一本無駄なく射て、數人を斃したので、つひに誰も近づかなくなつて、ただ遠廻しに取巻くのみとなつた。そのうちに萬は全速力で奔り出した。捕手は追ひながら、弓を射るが、少しもあたらない。一人がそれよりも先きに走つて、河のほとりに身を伏せながら、萬の膝を射た。萬は、すぐさまその矢を抜き、なほしきりに射たが、やが

て膝の痛みにたまらず地に倒れ、續いて飛んで来る矢を切りはらひ、力が盡きると、弓と太刀とを河に投入れ、小刀を抜いてみづから首を刎ねて死んだ。

事は河内の國司から報告された。朝廷におかれては、

「萬の身を八段に斬り、八國に分けて人人に示せよ。」

との命令が發せられた。そこで命令どほりに、その屍を八段に斬らうとすると、急が雷がとどろき出し、大雨も加はり、物凄い天候となつた。そのなかを萬の飼ひ犬がどこからともなく飛出して来て、屍のまはりを二三回吠えながら廻つたと思ふと、その頭を口に啣へたまま、何處ともなく奔り去つてしまつた。そのうち、しばらくしてある人が、萬の先祖を葬つた墓の前に来てみると、生前彼が愛してゐた飼ひ犬が、彼の生首をその墓に備へたそばにうづくまり、餓死してゐたといふ。この事が、また國司から奏上されたので、朝廷では、特別の思召から、萬の一族に命じて、罪人としてではなく、一般の人間として、萬を葬ることを許された。そこで人人は、有眞香邑に二つ並んだ墓をつくり、萬とその愛犬とを葬つた。

藤原鎌足

藤原鎌足は、またの名を鎌子、本姓を中臣といひ、その父の御倉子の地位は小徳冠であつた。鎌足の先祖は、瓊瓊杵尊と共に高天原から下界に降つた天兒屋根命までさかのぼることが出来、天兒屋根命の孫にあたる天種子命は、神武天皇に仕へ、わが神神のお祭りを掌つた。それから八世の孫の大鹿島命は、垂仁天皇の御代、天照大神の御宮を伊勢に建てるときに、祭主に任命された。さらにその十一世の孫にあたる常磐大連は、欽明天皇の御代に、はじめて姓を中臣と賜つた。この常磐から可多能祜、可多能祜から御食子、御食子から鎌足といふのが、一家の系譜であつた。

さて、鎌足は、皇極天皇三月に神祇伯となつたけれども、病氣を口實として出仕せず、三島の自邸にゐた。まだ孝徳天皇が皇太子にましました頃、鎌足はつねに御前に伺候してゐたが、太子が御脚を病まれて朝廷に出られない日が續くと、自分も太子の御邸宅に寝とまりして、御機嫌を奉伺した。それで太子も鎌足のために別間をあげ、新しい夜具などを用意されて優遇なされたの

で、鎌足もそれに感激して、「かならず太子様が御即位あそばされますやうに、私はどんなにでも骨折をおしませぬ。」と、侍臣を通じて申上げた。これを聞召した太子が、御満悦あそばされたのはいふまでもなかつた。

當時、朝廷のなかで絶大な勢力を持つた蘇我入鹿は、ひそかに臣下として望むべからざることを見込んでゐた。鎌足はこの形勢をさとり、蘇我氏をほろぼして國家の危険を防ぐ責任は自分にあると、深く決意をして、諸皇子のなかから中大兄皇子の御人格を見抜き、法興寺の蹴鞠の會に意氣投合した。しかも、たびたび會合を催しては、人の疑ひを招くかも知れぬとの考へから、支那から歸朝した南淵請安に儒學を學ぶ往來の車のなかで、皇子と共に計畫をすすめてゐた。彼は入鹿を斃すためには、その親戚である蘇我石川麻呂を味方にする必要があると考へ、皇子に勸めてその女を召されるやうにし、またその他にも二三の有力者を得た。かうして皇極天皇の四年六月、三朝の使者が貢物を披露した日に、大極殿の御柱は、悪臣入鹿の血で赤くそまり、父の蝦夷も間もなく誅に伏して、國家の大難は未然に防がれた。

蘇我氏をほろぼした功勞は、まつたく中大兄皇子にあると認めたまふた皇極天皇は、やがて皇子に御位を傳へようとなされた。それを皇子から承つた鎌足は、

「古人大兄皇子は殿下の御兄君にあたられます。それにもかかはらず、御兄君をさしおいて御即位あそばされたならば、長幼の順において非難を得たまふかも知れません。そのうへ、殿下にはなほ、輕皇子といふ御舅様がゐられますから、まづ輕皇子に譲りたまうて、天下の人望を得るのが第一ではございませんまいか。」

と申上げた。皇子もその諫めをお用ひになり、ひそかに天皇に奏上して、つひに輕皇子が立てられ、孝徳天皇となつた。この故に孝徳天皇は鎌足を内臣としたのみでなく、ほとんど國政についての一切を委せたまふに至つた。鎌足もまた誠實に國政を處理して、中大兄皇子と共に、あの大化改新といふ大事業を完成した。

孝徳天皇から齊明天皇に、齊明天皇から天智天皇へと御代がうつると間もなく、鎌足は危篤に陥つた。天皇は特にその邸宅に御臨幸あらせられて、親しく遺言を聞かれると、彼は聖恩に感激しつゝ、

「才能のない私は、この世に生きてゐる間、御國の御爲になにも盡すことができませんでした。せめても死後、人人に迷惑をかけたくないといふのが望みでございます。どうか私の葬儀は、できるだけ簡單に行つていただきたいと、そののみお願い申上げます。」

と、お答へした。車駕が還御あらせられると、つづいて皇弟の大海人皇子が見えられて、歎慮のほどを傳へたうへ、大職冠を賜ひ、大臣の位を授けられ、姓を藤原と改めさせた。

彼には二人の男兒があつた。長男は僧となつて定慧といひ、唐に留學した。次男は不比等であるが、これには別に傳記がある。鎌足が天智天皇元年十月に崩すると、その屍ははじめ攝津の阿威山あゐやまに葬られたが、定慧が唐から歸朝したのち、大和の多武峯たぶのふかに改めて葬つた。づつと後の世になつても、國家に何か變事があると、彼の墓所を中心とした土地が物凄い音をたてて鳴り響いたといふ。

蘇我倉山田石川麻呂臣

蘇我馬子の孫、倉麻呂の子にあたる。皇極天皇四年に、中臣鎌足と協力して入鹿を誅した功を

認められて、孝徳天皇が御即位あらせられると右大臣に任命された。このとき、左大臣を拜したのが阿部倉梯麻呂くらはしであり、ここにはじめて左右兩大臣が揃つた。倉梯麻呂は大彥命の子孫で、内麻呂ともいひ、世間では大鳥大臣おほとりのおおほと稱した。

母を異にした弟を一人、石川麻呂は持つてゐた。この弟が大化五年に、

「私の兄は殿下が海邊に遊びたまふてゐるとき、弑したてまつらうとしてをります。」

と讒言した。皇太子はこれを知召されてすぐさま天皇に奏上すると、天皇も以ての外に思召され、時を移さず、大伴狛おほとも、三國麻呂公みくにのまろ、穂積嚙臣ほつみのくしらをつかはして事情を調査せしめられた。すると石川麻呂は、

「自分の潔白なことは、陛下の御前で申陳べよう。」

といつて、宮中に参内しようとした。その様子に天皇はますます憤りたまひ、兵隊を派遣してその邸宅を取巻いたので、彼はやむなく一族と共に大和方面に逃げ、長男興志こしが營んでゐる寺に入つた。

父の無實の罪を知つてゐた興志は、兵をあつめ、皇居を焼討ちにする計畫をたてた。石川麻呂

はそれを聞くと、すぐにわが子を召し寄せ、
「おまへは死ぬのが惜しいか。」

と問ひ、

「決してそんなことはありません。」

といふ返辭を得たのち、一同にむかつて切に忠義の道を説き聞かせて、家族と共に佛壇の前で縊死してしまつた。當時、この事件に連坐して生命を奪はれたものが二十三人、流されたものが十五人もゐたが、のちに疑ひがはれると、皇太子は非常に御後悔あらせられて、彼の弟を筑紫の太宰帥とした。これは體裁のよい流刑であつたから、時の人は隠び流しといつて痛快がつた。

蘇我赤兄臣

蘇我赤兄もまた馬子の孫、倉麻呂の子であつた。齊明天皇が牟婁の温泉に行幸ましまして、彼がその留守をうけたまはつてゐる間に、有間皇子が謀叛をたくらんだが、赤兄はすぐさま皇子とその一味とを捕へて、全部誅した。

これらの功を認められたものか、天智天皇二年には筑紫帥に、四年には左大臣となつた。やがて天皇が御危篤になられると、赤兄は志を同じくする人人と共に皇太子大友皇子の御味方を申上げ、誓ひ、そののちも誓つたとほりいろいろと盡力した。ために天武天皇が御即位あらせられると、罪を得て流されてしまつた。壬申の亂には弘文天皇のために忠誠をいたした十八人の朝臣のなかでの代表者であつた。

小野臣妹子

先祖は天帶彦國押人命六世の孫にあたる米餅大使主命までさかのぼることができる。代代近江國滋賀郡小野村に住んでゐたため、小野といふ姓をつけた。

妹子は推古天皇の御代に大禮の位を得てゐた。その十五に鞍作福利といふものを通譯として、隋の國に使者となつて赴いたが、隋の人人は彼のことを蘇因高と呼んだ。一年あまりとどまつていよいよ歸國するとき、隋の煬帝はその家來の裴世清を答禮使に選んで、一緒に日本によこした。その途中、百濟人のために隋からの答書を奪はれると、歸國した妹子は、ありのままを少し

も飾らずに奏上した。

公式の使者が、答書を失ふといふ罪は、當時でも小さくなかつた。天皇は妹子の處罰について群臣の意見を求められたまひ、その席上、

「使者にとつて、使命を達するかどうかは、生命よりも重大でございます。隋の返辭を失つた妹子は、流刑が至當かと存上げます。」

といふ強硬論者を押へられ、

「それでは、一緒に來た隋からの答禮使の手前もはづかし。」

と、別に罪も問はせたまはず、裴世清を國賓待遇とした。やがて裴世清が歸國する段になると朝廷では、ふたたび妹子を大使に、難波吉士雄成を副使に、福利を通譯に任命して、また隋國に赴かした。その翌年九月、妹子は無事に使命をたはして日本に歸り、だんだんと地位が進んで大徳冠とまでなつた。

藤原朝臣不比等

内大臣藤原鎌足の二男であつた。持統、文武、元明、元正の四天皇に仕へたが、名門の出であるために地位はどんどん進み、和銅元年には正二位右大臣となり、さらに養老二年には、太政大臣に任ぜられたけれども、辭して受けなかつた。文武天皇四年には、勅を奉じて律令を編み、慶雲元年には八千戸の封を増し、四年にはまた五千戸を賜うて、

「子孫に傳へよ。」

とのおほせごとを拜した。しかも不比等は、そのうち二千戸を受け、一千戸を子孫に傳へることとして、残りの部分には手もつけなかつた。

かうして、養老四年に彼が六十二歳で薨すると、元正天皇は深く悼惜したまひ、彼のために朝を廢し、詔して太政大臣正一位を賜り、文忠といふ諡を授けられた。不比等の子たちのなかで、武知麻呂、房前、宇合、麻呂らの男はみな一家をなし、女は文武夫人となつた方、聖武皇后となられた方もあつた。

藤原武智麻呂

不比等の子武智麻呂は、元明、元正兩朝の間に從四位上近江守となり、近江地方の寺院を修理して才能を認められた。そのうち、元正天皇の養老年間には從三位中納言に進み、聖武天皇の神龜年中に正三位、天平元年に大納言兼太宰帥、六年に從二位右大臣と、年と共に地位は上つて、九年七月に危篤となると、正一位左大臣を授けられた。世間では、彼の邸宅が、弟房前の南隣にあつたから、この一家を南家といひ、房前の一門を北家と呼んで區別した。その子仲麻呂の代になると、太政大臣を賜はらんことを奏請し、勅許を得て、天平寶字年間に、武智麻呂は太政大臣となることができた。

藤原房前

不比等の子、武智麻呂の弟であつた。文武天皇の御代から朝廷に出仕して、從五位下となり、元正天皇の靈龜年間に從四位下、養老元年に參議、五年に從三位下に進み、天皇崩御に際しては畏れ多くも優渥な勅を賜はつて、國政を補佐することになつた。やがて聖武天皇が御即位あらせられると、彼は正三位から中務卿、民部卿、中衛大將と累進し

天平九年に五十七歳で薨じた。朝廷では、大臣の資格で葬儀を行ふことを許したまふたが、房前の家で固く御辭退を申上げたので、正一位左大臣を贈り、やがて淳仁天皇の天平寶字四年になると、太政大臣をも重ねて贈りたまふた。

藤原宇合

不比等の第三子で、武智麻呂や房前の弟にあたる宇合は、元正天皇の靈龜年間に遣唐副使となり、從五位に叙せられた。養老年間のはじめに唐から歸つて常陸守に任ぜられ、正四位上に進み式部卿となつたが、聖武天皇の神龜元年に持節大將軍となつて蝦夷を討ち、その功勞によつて從三位勳二等を授けられた。そのうち、天平三年には參議兼式部卿になり、正三位に進んで太宰帥をも兼ね、九年に四十四歳で薨じた。

彼は器量の大きな人物で、軍務の傍ら、つねに文事をたしなんだ。當時、文武兩道に達した人物として、彼の評判は相當に大きく、長い間式部卿の職に在つたので、その一家は式家といはれた。

藤原麻呂

麻呂もまた不比等の子で、養老年中に從五位下、左右京大夫を経て、天平のはじめには從三位となり、兵部卿、參議から、山陰道鎮撫使に進んだ。同じく九年に、鎮守府將軍大野東人が蝦夷を伐つて出羽柵まで皇威をかがやかすと、彼は持節大使となつてはるばる陸奥方面に出張し、東人と共に戦後經營に骨折り、四十三年で薨じた。

彼は多方面の才能を持ち、文章も巧みであつた。けれども平素はつねに酒を飲み琴を弾むだけだ。當今は、上に聖天子がましまし、下に賢臣がある。自分などの出る幕ではない。好きな酒と琴だけあれば十分だ。」

と、言つてゐた。かうして特別に才幹を發揮せぬうちに薨じたため、世の人人は聞き傳へて残念がつたといふ。彼がしばらくの間、左右京大夫であつたので、その一門を京家といつて、他から區別されてゐる。

藤原貞敏

世に京家といはれた藤原麻呂の三世の孫にあたる。祖父は「歌經標式」を遺んだ濱成、父は天文や音楽に通じてゐた繼彦で、貞敏はその血を繼いで若いときから音楽を好み、琴と琵琶とがもつとも得意だつた。

仁明天皇の承和年中に、彼は美作掾となつたが、間もなく遣唐使に従つて唐に赴いた。ときに唐では、劉二郎といふ琵琶の名人がゐて、世に評判であつた。貞敏は好む道だから一度その琵琶を聞いてから、忘れることができません、どうにかして劉二郎から秘曲を授けられたいと考へて、沙金二百兩を持參してその弟子となつた。異國人のことだから簡單なものがよからうと、劉二郎ははじめは莫迦にしかかつかつたが、あまりにも彼が熱心に學ぶ態度を見て感心し、二三の曲を教へると、すぐに覚え込んでしまつた。それではと少し複雑なものを教へると、これまた数日のうちに弾けるやうになつたので、つひに自分の知つてゐる限りの秘曲を授けたうへ、娘と結婚させてしまつた。劉二郎の娘も、さすが名人の子だけあつて琴が上手なので、彼は今は新妻となつた

その娘から新曲をいくつか習った。やがて歸朝する時がせまると、劉二郎は送別の宴を張り、彼に紫檀と紫藤の琵琶を一張づつ送った。歸朝したのち、それを朝廷に献上したのが有名な玄象、青山の琵琶である。

かうして日本に歸つた貞敏は、間もなく五位下三河頭となり、文徳天皇の齊衡年中には従五位上に進んで備前介を兼ね、天安年中には掃部頭に任ぜられ、清和天皇の貞觀年中に備中介を兼ねて、その九年、六十一歳でこの世を去つた。彼は仁明、文徳、清和の三朝に仕へ、政治的の手腕こそなかつたが、琵琶の名人といふ點で、時の人人からもてはやされた。

橘朝臣諸兄

難波皇子の曾孫で、はじめの名は葛城といつた。元正天皇の和銅年中に従五位下馬寮監に任ぜられ、聖武天皇の天平初年に正四位下左大辨となり、三年に参議、四年に従三位に進んで、八年には勅許を得て、姓を橘と改めた。そののち、九年に大納言、十年に正三位となり、つづいて従二位を授けられ、十五年には従一位左大臣兼大宰帥の地位を得、孝謙天皇の天平勝寶元年には正

一位となつた。同じく八年に隱居して、翌年、七十四歳で薨じたが、彼こその中に多くの橘姓を名取る人人の元祖であり、井手里に住んでゐた關係上、世に井手左大臣といはれた。

秦造河勝

山城の葛野で生れた。推古天皇十一年に、聖徳太子が佛教を信じたまふたあまり、凡ての朝臣に佛像を禮拜させようと言はれたとき、河勝は進んでそれを受け、蜂岡寺を造つて安置した。

皇極天皇の二年のことである。東國の不盡河のそばに大生部多といふものがあつて、あやしげな虫を飼ひ、

「これこそ常世の神である。」

と、いひふらした。附邊の神主らもこれが一味となり、

「常世の神を祭れば、貧乏人もたちまち金持となり、老人も見ると若返る。」

と宣傳したため、無智な人人は、争つて財産を投げ出し、神の利福を得ようとした。が、もともと神といひふらすものの大體があやしげな物であるため、評判が高くなればなるほど、貧乏人

は増しても金持には一人もならず、年の若返るものなどは無論なかつた。河勝は彼等が妖術で民を惑はすことをにくんで、大生部多を捕へて獄に入れてしまつたので、神主らもそののちは何も言ひ出さず、その地方の民は、根據のない宗教から救はれることができた。

道君首名

道君首名は、文武天皇の御代に律令の選定委員の一人となり、大寶のはじめには、僧尼についての法律を大安寺で解説したことがあつた。和銅年間には従五位下に叙せられ、新羅に使者となつてゆき歸つたのちは筑後守となり、養老二年に正五位下に進んで、五十六歳で死んだ。

彼は歴史のうへにその名を輝すほどの大人物ではなかつたが、若いときに律令を選んだだけあつて、吏道には十分通じ、筑後守となると、あらゆる苦勞をなめて任地の人人に産業をすすめた。ときにあまりに嚴格すぎて、一時は土地のものから憎まれたこともあり、殺されようと思つたけれども、その土地と民とを愛する誠意はかはらず、耕作のこと、果物のこと、鶏や豚を養ふこと、池を堀ることなどを熱心に指導して、やがてその地方一面に良い評判をのこした。それ

で清和天皇の貞觀年中には、彼の在任中の功績が朝廷にまで聞え、従四位下を贈られてゐる。

山田宿禰古嗣

左京の人で、父の益人は、外従五位下、勳六等、越前介であつた。古嗣は生れつき孝行の心が深く、謙讓を守り、言葉すくなの人物であつた。幼いときに生母をうしなつて伯母に養はれたが、あるとき讀書をしてゐて「樹靜かならんと欲すれども風止まず、子養はんと欲すれども親在さず」といふ部分が出て來ると、思はず涙を流してとどまらず、ために着物がすっかり濡れてしまつたとの傳説がある。そののち父の死に際したときも、定められた期間以上に喪にこもつてゐた。淳和天皇の天長年間に大外記まで進み、仁明天皇の承和年中に従五位下阿波介となり、池を多く堀つてその地方の水利を通じ、文徳天皇の仁壽年間には、左京介となり、やがて従五位上相模權介に任ぜられて、五十六歳で在官中に世を去つた。

藤原朝臣高房

参議藤原藤祠の子高房は、六尺に達する大の男で、力も強く、正義のためには何物をも恐れぬといつた氣概もあつた。嵯峨天皇の弘仁年間の末に右京少進となり、淳和天皇の天長二年には式部大丞にうつり、その翌年、從五位下美濃介に任ぜられて、それまでの弊風をもすつかり改めさせた。

彼が美濃に在任中、地方官としての才能を示した事柄が一二あつた。あるとき、その地方を巡視してゐると、安八郡に堤防の決壊してゐる場所があつた。「ここを修理すれば、近くの土地が非常に水通しがよくなるものを、どうしたのであらう」と考へた高房はそばのものに質問した。「なぜ、堤防をこはれたままにしておくのか。」

「この河には神様がをりまして、堤防を繕つたものは、皆その祟りで死んでしまいます。多分、神様がそれを嫌はれるのであらうと、この前に來られたお役人様も、修繕を禁じました。」
「そんな莫迦な事があるものか。よし、萬一あつたとしても、土地の人人に利益になる仕事をして、それで死ねば本望だ。」

かう云つた高房は、人人を激勵してその部分を修理したので、水利ははなはだ良くなり、收穫

も急が増した。

また、この當時、席田郡に妖術を行ふ巫女がゐて、年年歳歳、その勢ひは強くなり、相當に土地のものに害を及ぼした。役人たちもこの巫女を逮捕したく思つたが、何分にも妖術を使ふといふので恐れをなし、誰一人として近よるものとてなかつた。その噂を耳にはさんだ高房は、供もつれずに巫女の家に入り込み、その場で捕へてしまつたので、これほどの騒ぎも、あつけなく終つたといふ。彼はそののち、備後、肥後、越前の守を勤め、著しい功勞を見せて、文徳天皇の仁壽元年に五十八歳でこの世を去つた。

紀朝臣夏井

大納言紀古佐美の三世の孫にあたり、父の善岑は從四位下美濃守であつた。夏井は生れつき性質が溫和で多藝多才であり、身長は六尺三寸の大男であつた。

まづ、彼は隸書が巧みであつた。文徳天皇が御即位ましますと、彼の評判を聞召して御前に招きたまふたことがあつた。その際に夏井の衣服があまりに粗末であつたといつて、お傍の人人が

笑ふと、天皇は、「人物を着る物で判断するとは何事だ。」とのたまふて、そののちもたびたびお召しになつた。

かうして彼は嘉祥三年に小内記となり、齊衡元年に美濃小掾兼任を命ぜられると、それを義兄の大枝に譲り、二年には大内記に轉じ、從五位を授けられて右少辨に轉任した。夏井は義理を重んじ、人に媚びず、役得のある地位をねらはなかつたために、常に清貧に甘んじてゐた。それを天皇は御同情あらせられて、邸宅を賜はつたけれども、それだからといつて、陛下にまで御遠慮申上げず、ときに言葉を強めてお諫めすることもあり、天皇もますます彼を重んじたまふた。やがて從五位上に進み、播磨介と式部少輔とを兼ね、間もなく右中辨になつた。

天皇が崩ぜられると、讃岐守となつて地方に出たが、身から滲み出る徳は、地方の人人にも深い感化を及ぼして、任期が満ちて歸らうとすると、人人は代表者を帝都までつかはして留任を請ひ、その結果、さらに二年間讃岐にとどまつて、地方政治を行つた。いよいよそれも終ると、土地のものはかす／＼の贈り物を持參して別れを惜しんだが、夏井はそれらに一切手をつけないで

都に歸つてしまつた。無理にも納めていたかどうかと、更に代表者がはるばる彼の邸にまで、品物を持つて行くと、それらのなかから紙と筆とだけを留めて、他はすべてかへしてしまつたといふ。この淡泊な性質を彼の母も十分に知つてゐたのであらう。彼が清和天皇の貞觀七年に肥後守に任ぜられると、

「肥後地方の風俗は相當に素れてゐると聞いたから、わが子のやうな潔白なものは、皆から憎まれて、お役を長くつづけることはできない。」と、涙を流して嘆いたとの話が傳はつてゐる。

夏井には豊城といふ義理の弟があつた。あまり品行がよくなかつたため、彼はいつも意見を加へてゐたが、やがて豊城は彼と共に生活するのを嫌がつて、大納言伴善男の家來となつた。ところが善男が朝廷から罰せられたとき、その家來の兄だといふ關係で、夏井もまた土佐に流されることとなつた。彼は心のなかで不満に思つたけれども、争ふ筋でもないので、使者にしたがつて國境を出た。すると、この噂を傳へ聞いた肥彼の人人は、路いつばいになつて、彼を通さず、泣いてとどめようとした。やがて彼が讃岐を過ぎれば、ここでも老若男女が道路に出て、數十里の

間、名残を惜しんだといふ。それから数年たつて母がこの世を去ると、自宅の傍に小さな小屋を造つてその骨を納め、生きてゐる間と同じやうに奉仕した。もともと彼は佛教を信じてゐたが、母と死別してからは、毎日かならず大般若經五十巻を読み、三年間一日缺かさなかつた。

多藝多才な夏井は、書道のほかに碁が上手、うらないが巧みで、また醫藥にくはしかつた。文徳天皇がお傍のものどもと釣を隠してそれをいひあてる遊びをされたとき、ひそかに夏井を召して、釣の行先をうらなはせたまふた。彼はしばらく考へてゐたが、

「青い衣を着けた乙女が、頭に白い花を挿してゐます。釣はその乙女の左手にあります。」

と申上げたので、そのとほりを探すと、果して釣は発見された。また、彼が土佐に流されたとき、自身で山のなかを探つて藥草を見出し、それを調合していろいろの病人を助けたことがあつた。ある人が、急に氣がちがつて、髪をふり亂しながら走り廻るのを、彼はわづかの藥でたちどころに正氣にもどしたこともある。彼が醫藥方面に深い知識を持つてゐたことは、かうした一二の例でも、よく分かるであらう。

高向史玄理

はじめは高向漢人といひ、また黒麻呂といふ字も書いた。推古天皇十六年に、小野妹子が隋に赴くとき、留學生となつて同行して、三十三年間も異國にとどまり、舒明天皇の十二年に歸朝してから、大化元年には國博士となり、小徳冠の位を頂戴した。翌二年には使者となつて新羅に行き、人質を要求して歸り、五年には大錦上の位を得た。

やがて白鳩五年となると、大使河部臣麻呂、副使藥師慧日らと共に唐を目ざして二隻の船に乗つて出帆したが、彼の乗つた船は數日の間漂流して朝鮮に着いた。そこで陸路長安に達して、唐の高宗に謁見した。その際、高宗の近臣から、日本の地理や神神の名を問はれると、すぐさま立派に答へて、滿座を驚かせたといふ。かうして彼はふたたび日本に歸る機會なく、支那の土と化した。

阿倍朝臣仲麻呂

中務大輔船守の子で、生來目から鼻に抜けるほどの利口者であり、また讀者が好きだつた。それで元正天皇の靈龜二年に、數多くの人人のなかから選ばれて遣唐留學生となつたが、ときにわづか十六歳の少年であり、位は従八位上にすぎなかつた。

海上つづがなく唐に着くと、姓を朝衡とかへて學問し、玄宗の信任を受けてどしどし地位が進んだ。孝謙天皇の天平勝寶年間に、藤原清河が遣唐大使となつて唐に來ると、彼は玄宗の命を受けて接待役になり、いろいろと便宜をはからつたが、やがて清河が歸國する時になると、共に日本に歸りたく考へ、玄宗の許可をあふいだ。玄宗もまた仲麻呂の心を察し、快くそれを許して唐からの使者といふ名目にした。

支那は彼にとつて第二の故郷であつた。長い間、彼を優待してくれた玄宗や詩人たちと別れることは、悲しいとか、残り多いとかいふ氣持を越えて、斷腸の感慨があつたのであらう。玄宗の宮殿をこの世の見おさめと考へつつ去るとき、彼はこんな詩をつくつた。

命を啣みに將に國を辭せんとする
非才侍臣を忝うす

中天明主を戀ひ

海外慈親を憶ふ

伏奏して金闕を違り

駢駘玉津を去る

蓬萊郷路遠く

若木故園隣る

西望恩を懐ふの日

東歸義に感ずるの辰

平生一寶劍

留めて交を結ぶの人に贈らん

恩を思へば仲麻呂は支那を去り難く、義を考へれば彼は日本に歸りたい。恩と義との間をさまよひつつ、彼は一つしかないわが身を寧ろうらめしく感じたに相違なかつた。仲麻呂の複雑多感な心を酌んで、時の詩人たちは、揃つて送別の詩をつくつて行を送つた。かうして明州まで來て

いよいよ唐の人人と別れようとするとき、彼は空にかかる明月を望んで、感慨無量な心中を、天の原よりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

とうたひ、自身で漢讀して示すと、その場にゐた一同は皆感心した。

ところが、清河や仲麻呂を乗せた船は、出帆すると間もなく暴風に襲はれて、安南地方に漂泊してしまつた。唐では、仲麻呂が溺死したとの評判が立ち、當時第一流の詩人と自他共に許してゐた李白は、親友の死をいたむ詩をつくつてその靈を慰めることなどがあつた。しかも彼は安南で助かつて又長安に現はれ、肅宗に仕へて北海郡開國公といふ地位にのぼり、わが光仁天皇の寶龜元年正月、七十歳の高齢で唐で卒したのである。

十六歳から七十歳まで、彼が唐にゐた年限は、五十年以上となる。その間に相當な出世をして生活に何一つ不自由なことはなかつたけれども、機會を見て故郷に歸りたいといふ心は、一日も身を離れたことはなかつた。新羅の使者が唐に達したとき、郷里の親しいものどもへの手紙を頼んだり、日本の話が出ると、急に悲しさうな顔色になつたりしたといふのは、彼もやはり日本人

で、魂まで異國化しなかつた證據であらう。

大伴宿禰古麻呂

大伴古麻呂は孝謙天皇の天平勝寶元年に左少辨となり、二年には遣唐副使に選ばれて唐にでかけた。唐に着いて三年目の元旦のことである。玄宗が含元殿で拜賀の式を催した際に、彼の席次は新羅、吐蕃の下に置かれてあつた。そこで彼はすこぶる憤慨して、

「新羅は久しい間日本に朝貢してゐて、謂はば日本の屬國であるにもかかはらず、上席に置くのは何事ですか。」

と抗議を申込んだ。その態度があまりに眞剣であつたため、唐の將軍吳懷實は、新羅の使者を第三位に置き日本、吐蕃、新羅の順に席をとつて無事拜賀式を終へた。彼はかうして、六年に歸國すると、ただちに左少辨に轉じ、正四位下に進み、天平寶字のはじめには陸奥の鎮守將軍と按察使とを兼ねた。けれども、橘良麻呂が廢立をはかつたときに、その一味となつたとの理由で捕へられて拷問を受け、獄中で死んでしまつた。

藤原朝臣廣嗣

式部卿藤原宇合の長子であつた。容貌はいかにも男らしく、頭に一寸あまりの瘤があつて、遠くからも廣嗣といふことが誰にもわかつた。彼は青年時代から讀書に親しみ佛教に通じ、武藝はいふまでもなく、天文、音楽方面にまで人並はずれた深い理解を示した。聖武天皇の天平年中に従五位に叙せられ、はじめは大養徳守となつたが、のちに太宰少貳に轉勤した。

當時、宮中に勢力のあつた吉備眞備は、あるとき、廣嗣を一目見て、

「彼はやがて世の中を騒がせるであらう。」

と豫言した。當時僧玄昉は僧正となつて宮中に入出し、皇后の御信用を得てはゐたが、その性質の良くないのを知つた廣嗣は、それを退けるように天皇にお願ひ申上げたが御嘉納にならなかつた。かうした不愉快な記憶がまだ去らないうちに、京都にゐる妻のもとから、

「玄昉は實にみだりがましい人物でございます。主のある私に懸想していやらしいことばかり申します。」

といふ手紙に接した。之について廣嗣は我慢が出来ず、十二年八月になると、玄昉、眞備の兩人を是非とも放逐していただきたい旨の内容を上表した。

この上表文には、相當に激しい字句が用ひられてゐたのみでなく、時の政治方針を生きびしく非難したとの理由で、朝廷からは顧みられなかつた。廣嗣は、もう合法的な手段では駄目だと観念したのか、翌九月に遠賀郡を根據地にして非常手段を執るに至つた。

朝廷では、廣嗣の謀反を聞召して、大野東人を大將、紀飯麻呂を副將として進軍させ、諸國には彼の罪狀を傳へて、それを殺したものに恩賞を賜はる旨を發表された。東人らが九州路に入らうとすると、廣嗣は、小長谷常人、三田鹽籠、凡河内田道らを部將に命じて防がしめた。兩軍は豊前で激戦を交へた結果、常人と田道とは戦死し、鹽籠は二個所に矢傷を受けて土地のものに殺され、部下の一千七百六十七人は捕虜となつた。

十月になると、廣嗣はみづから大隅、薩摩、筑前、豊後の兵一萬を率ゐて鞍手道から、弟の綱手は筑後、肥前の兵五千の將となつて豊後から、また多胡古麻呂は田河道から、それぞれ逆襲の態度に出だ。廣嗣の軍は先登になつて板櫃川に達し、筏を作つて川を渡らうとすると、官軍の陣

營からは佐伯常人、安部蟲麻呂らが手勢を引きつれて出て、大弓を射たため、やむを得ず兵を引き、西岸に陣を張つた。東岸の官軍からは、やがて五六人の兵が河岸に出て、

「反逆者にしたがつて官軍と戦ふものどもは、妻子や親族まで罪が及ぶぞ。」

と、大聲で口口にさげんだ。そのため廣嗣の陣營からは、一人も弓を射る兵はなくなつてしまつた。

やがて、常人はわづかの部下と一緒に河岸へ姿をあらはし、十度も繰返して廣嗣の名を呼んだが、誰も答へなかつた。しばらくして廣嗣は馬を馳せながら、西岸に立ち、叫んだ。

「勅使が下向したとかいふが、誰であるか。」

「佐伯常人、安部蟲麻呂である。」

との聲を聞くと馬から下り、叮嚀に禮をしてから、

「勅使とあればわが心底を申し上げます。私は決して朝廷に反旗をひるがへしたのではありません。ただ國を亂す二人の悪臣を誅したいと思ふばかりです。」

といつた。が、

「それならば、なぜ兵を挙げたのか。他の方法もあつたらうのに、それを盡さぬではないか。」

と反問されて言葉につまり、無言のまま馬に乗つてその場を去つた。

やがて官軍三人が川を泳いで渡ると、續いて二十人ほどが早く上陸した。いまはまつたく國志を失つた廣嗣の軍は、どしどしとそれに降参して、全軍がさんさんに敗れたため、彼は馬上で西に逃げ、海路ちのしほ値駕島から長野村に上つたとき、安倍黒麻呂といふ男に捕へられ、十一月に松浦郡で殺されてしまつた。

後十七年十一月廣嗣が憎んだ、僧玄昉が筑紫に流されると、その翌年には、不思議な病氣で死んでしまつた。また孝謙天皇の天平勝寶のはじめに、玄昉と共に廣嗣が憎んだ眞備もまた皇都を逐はれて筑前守に命ぜられ、やがて肥前守となつた。眞備はこのときになつて自分の非をさとつたものか、任地に赴くと、すぐさま廣嗣の墓に参つて、鏡尊廟かがみのみことのかみといふ社を建て、折折の祭を怠らなかつたといふ。

橘朝臣奈良麻呂

左大臣橘諸兄の子で、聖武天皇の天平年間に従五位下を授けられ、やがて大學頭、攝津大夫、民部大輔を勤めて、従四位下に昇進し、孝謙天皇の御代には、正四位下、参議から左大辨を兼ねた。當時、惠美押勝（藤原仲麻呂）は天皇の御信任を受け、紫微内相といふ位にのぼり、我儘勝手な態度があつた。奈良麻呂はこれを憤つて、押勝を朝廷から逐はなければならぬとの覺悟を定め、ひそかに道祖王、鹽燒王、安宿王、黄文王、小野東人、大伴古麻呂らと相談のうへ、押勝を殺さうとした。しかしながらこの陰謀はいつしか洩れ、彼は捕へられて流罪となつた。やがて仁明天皇が御即位あらせられると、皇太后が奈良麻呂の孫にあたられたため、正三位を贈り、間もなく大納言を贈り、つひに太政大臣従一位を賜つた。

橘逸勢

橘清友の子で、奈良麻呂からいへば孫にあたる。桓武天皇の延暦年間に、遣唐使にしたがつて唐に赴いたが、いづれの方面にも人並み以上の才能があつたため、留學中は橘秀才といふ名で通つてゐた。歸朝ののち、しばらくは病氣のため休養して、やがて従五位下、但馬權守となつた。

ときに仁明天皇の承和七年であつた。

當時、天皇は、淳和天皇の皇子恒貞親王を皇太子になされてゐた。しかし、これはいろいろな關係からさうなされたので、實は歡慮はそれを悦びたまはず、藤原氏もまた、皇太子の御生母が藤原の流を汲んでゐなかつたから、歡迎もしなかつた。かうして皇太子の地位は、まったく不安なものであつた。

この形勢に憤慨したのが、皇太子の補導をうけたまつてゐた伴健岑であつた。健岑にとつて、心血をそそいで御指導申上げた皇太子が、天位に即けぬやうなことがあつては大變である。彼はひそかに逸勢と相談して、太子を奉じて旗をあげ、反對者を一掃して、御即位を願はうとした。ところが、この相談が朝廷に洩れ聞えたとき、たちまち逸勢は役人の手に捕へられて、はげしい拷問を受けた。逸勢はあらゆる智慧をしぼつて申開きをしたけれども、朝廷の疑ひは晴れず、つひに姓を非人と改め、死一等を減じて伊豆に流されることとなつた。その途中、遠江の板築驛で、つひに病のために斃れたのであつた。

彼の性格はいかにも男らしく、細かい點などを問題としなかつた。多方面に才能があつたなか

で、書道は自他共に許したほどの上手であり、宮中のいろいろな御門にある額は、大體その手に成つた。世間では、嵯峨天皇、僧空海および彼を三筆といつて褒めたたへた。

藤原 仲成

藤原種繼の子仲成は、桓武、平城の御代に従四位上まで進み、北陸道觀察使兼右兵衛督となつて、やがて参議にのぼつた。が、性質は荒く、禮儀を知らず、酒をたしなみ、氣に入らぬことがあれば、誰の前でも不機嫌な顔をして當り散らすといつた我儘なところが多かつた。そのうへ、妹の薬子が平城天皇の御寵愛を受けるやうになると、ますます増長して、心あるものに眉をひそめさせる態度を、毎日のやうに繰返した。

嵯峨天皇が御即位あそばされると、薬子は平城上皇に勧めたてまつつて、ふたたび上皇が御位に即き、首都を別な土地に遷す運動をはじめた。といふのは、薬子自身、皇后の地位を得たくてたまらず、兄の仲成もまた、攝關職になりたいといふ野心を持つてゐたからである。上皇は薬子の奏上を納れたまうて、仲成に、

「新しい土地を選んで宮殿を造れ。」

と命じられたので、やつと京都に落ちついたばかりの人人は、不安のうちに日を暮し、夜を明かすやうになつた。

幸ひ御英明な嵯峨天皇は、さうしたことが上皇の御發意でないのを洞察あつて、斷乎として薬子の職を奪ひ、仲成を逮捕して殺さしめ給ふたので、大事件にならないうちに事は終つてしまつた。薬子はなほも上皇におすがりして虚榮心を満足させようと計つたが、結局失敗して毒を仰いで死に、仲成と共に悪名を千載に残したのである。

和氣朝臣清麻呂

鐸石別命の後裔であり、父の名は傳はつてをらず、法均尼といふ姉があつたことだけがわかつてゐる。備前藤野郡の人で、従六位上から右兵衛少尉となり、稱徳天皇の天平神護年間に従五位下に進み、近衛將監に移つた。

ときに日本を御統治あそばされた稱徳天皇は、平素から宇佐八幡宮をすこぶる御信用あり、何

か大事が起ると、かならず、使者をつかはし、その神託を受けて實行さるるのが常であつた。天皇が僧道鏡を御寵愛のあまり、法王にまでなされると、太宰神主の中臣習宜阿曾麻呂は、道鏡に媚びるために、

「道鏡を皇位に即ければ、天下は太平になると、神は教へられました。」と申上げた。

事は萬世一系の皇統に係する重大問題である。道鏡のことについて、何一つ御反対なされなかつた天皇も、これだけはたとへ神託であるとはいへ、御承知できる性質のものではなかつた。天皇は、そこで、誠忠の評判ある清麻呂を玉座近くに召したまうて、

「すぐ宇佐に出發せよ。昨夜朕は夢をみたが、夢のなかで、大神が汝の姉法均尼に憑つて、何か傳へたい旨をおぼせられた。法均尼に代つて宇佐に行き、神意のましますところを十分に承つて参れ。」

とのたまふた。清麻呂はつつしんで大命を奉じ、

「私が神意のあられる點をよく拜聴してまわりますから、決して御心配あられますな。」

と、心強く出發の用意にとりかかつた。

さて、いよいよ出發と定まつた四五日前に、道鏡は使を出して清麻呂をその邸宅によびよせた。見れば目に怒りを含み、劍を持つて清麻呂をにらみながら、

「宇佐の大神が、自分を皇位に即かせようとしてゐる。自分が皇位に即くのも即かぬのも、汝の報告一つで決定するのだ。もし、わが希望を達することができたならば、太政大臣の位を與へよう。しかしその反對であれば、かならず重刑に處するから、その覺悟で行くがよい。」

と、半分は利で誘ひ、半分はおどかした。また清麻呂の親友であつた路豐永は、彼にむかつて「道鏡がわが神國を支配するやうになれば、二三の同志と共に職を辭する。日本人である以上、一系の天皇以外に仕へる氣持はまつたくない。この點を含んで宇佐に行きたまへ。」と、はげますところがあつた。

もとより清麻呂は、大命を承けた瞬間から生命を棄ててゐた。

「自己を棄てて一心になり、神前にぬかつかう、さうすればかならず神は、わが國體を汚すやうなおぼせごとを賜はるまい。」

かう考へて、宇佐八幡宮の神前で、必死になつて禱つた。この真心が神に通じたものか、「わが國家は開闢以來、君臣の分が定まつてゐて、臣下のものが君となつた例はまだ一度もない。皇位を得る人は天孫に限る。無道の人は宮中から逐ひ拂へ。」

この神託が、たしかにその耳に入った。

さうした神託を一語もあまさず胸にたたみ込みながら、奈良に還つた清麻呂は、天皇をはじめたてまつり、固唾をのんで耳をそばだてる一同の前で、毅然として披露した。非望を木端微塵にうちくだかれた道鏡は、眞赤になつて憤り、清麻呂の本官を解いて因幡員外介といふ一地方官に落しやがて、神託といつはつて朝廷をあさむいたとの理由で、姓名を別部織麻呂と改めて大隅地方に流した。その途中、道鏡の命を受けたものが、彼の生命を奪はうとしたが、急に天地が眞闇となり、激しい雨にまちつて雷が鳴りはじめたため、目的を達することができなかつた。天皇は、さすがに清麻呂の忠烈をあはれみたまひ、大隅への流罪を赦され、當時参議であつた藤原百川は、備後で二十戸の封を割き、日常生活だけは差支ないやうにさせた。彼の姉法均尼もまた、道鏡に憎まれて罪を得た。

身を以て國難を救つた清麻呂の忠義な心が天に達したのであらうか、間もなく光仁天皇が御即位ましますと、道鏡は下野に流され、彼は姓名をむかしどほりに復して奈良に還ることができ、播磨員外介から豊前守に進んだ。そこで彼の行つた仕事は、宇佐八幡の神主を罰して、權勢におもねるものいましめとした。そのうち、桓武天皇の天應元年には、從四位下となり、延暦年中には從四位上に進んで攝津大夫となつたほか、民部大輔、中宮大夫を兼ね、河内と攝津との境界に新しく人工で川をつくらすなどの功があつた。さらに正四位下に昇進し、天皇に奏上して、京都の地を皇居に撰ぶ許可をうけたこともあり、十三年には從三位となり、十八年に六十七歳で薨じた。朝廷では生前の功勞を認め、薨するとすぐに正三位を賜つて靈をなぐさめたまふた。

坂上大宿禰田村麻呂

阿智使主の子孫にあたり、父は左京大夫田村麻呂であつた。田村麻呂は身長五尺八寸もある大男で、力が非常に強く、眼は隼のやうに鋭く、金糸に似た立派な鬚がはえてゐた。

桓武天皇が蝦夷を征伐されることになると、はじめ彼は副將軍に任ぜられて大伴宿禰弟麻呂の

指揮を受けたが、二十年には大將となつて陸奥に進み、翌年膽澤城を、その次の年には志波城を築き、武力によつて彼らを征服すると共に、恩愛あふるる軍政を行つて、その心の底にまで朝廷のありがたさを深く印象させた。

そののちは刑部卿から参議になり、平城天皇の大同年間には中納言に進んだが、つぎの嵯峨天皇の御代に、藤原仲成と薬子との變が起ると、天皇は彼が上皇の御味方となるのを恐れたまうて大納言とされた。田村麻呂はもとより忠誠無比の人物であるから、この場合、薬子に迷はされた上皇の御味方をして天皇に叛くやうなことなく、上皇が薬子をともなつて東國に赴かれやうとしたとき、美濃方面に軍を出して妨害し、その結果、薬子は毒を仰いで死に、上皇ははじめて御反省あらせられた。

かうした功勞をたてて、彼は弘仁二年に五十四歳でこの世を去つた。天皇はそのため一日間の廢朝をおほせ出され、從二位に進ませて、山城の宇治に葬つたが、死屍は立つたまま棺のなかに入れられ、武器、食糧を十分に満たして、京都方面に向けて埋めることになつた。謂はば死んでも皇居を守護したてまつる形式である。すつとのちまで、國家に何か重大事件が起ると、この墓

が大きな音をたてて、時の人人の注意をうながしたと傳へられてゐる。眞實はとにかく、征夷大將軍が東方に出征するたびごとに、田村麻呂の墓に詣つて、武運長久を祈ることはしばしばあつた。

吉備朝臣眞備

眞備の祖先は吉備彦命までさかのぼることができ、代代吉備の國に住んでゐたため、土地の名を姓とした。

元正天皇の靈龜二年に二十四歳で遣唐留學生となり、聖武天皇の天平七年に歸國した。日本から唐に留學した學者は、相當に多かつたが、唐で秀才の評判をとつたのは、彼と阿部仲麻呂だけだつたといふ點から考へても、その才能の程度が察せられる。歸朝ののちは從五位にのぼり、孝謙天皇がまだ東宮にあらせられたとき、いろいろと御輔導申上げたため、その御代には從四位となつた。

ところが、間もなくある事件に連坐して筑前守に左遷され、しばらくして肥前守に轉じ、天平

勝寶四年には遣唐副使となつて唐におもむき、六年に歸朝してから太宰大貳となつた。彼の建言によつて筑前に怡土城が築かれたのは、この頃のことであつた。また、八年には東大寺造營の最高責任者を命ぜられたけれども、病氣のため、それを辭退した。

やがて、僧道鏡に寵を奪はれたといふので、惠美押勝が叛亂を起した。そのとき、彼は召されて宮中に入り、從三位參議兼中衛大將を拜して、軍事に關係することになつた。彼は押勝の軍隊が皇軍に敗れて逃げ出すであらうと察し、その逃げ路をあらかじめ塞ぐのがよいといふ意見を出し御採用の榮に浴したが、はたして經過は彼の豫見どほりとなつて、この叛亂は半月ばかりで鎮まつてしまつた。それで神護元年に正三位、四年に中納言となり、すぐまた大納言、右大臣と地位は進み、位も從二位から正二位となつた。稱徳天皇が崩じたまふと、彼は文室淨三を擁立しやうとして、さかんに運動したものの、左大臣藤原永平、内大臣藤原良繼、右大臣藤原百川らの希望した光仁天皇が御即位あらせらるるに及び、職を辭して不平をまぎらはせてゐたが、寶龜六年に八十二歳を一期として黄泉に旅立つた。生前の功勞としては、大學に孔子を祭る儀式の用意を十分に備へたこと、大藏省の倉庫が焼けたときに、私財を出して造營したこと、二十四條の律令を

定めたことなどが擧げられる。

藤原朝成

藤原冬嗣の孫で、父は三條右大臣といはれた定方であつた。

醜いほど身體が肥えてゐたため、朝成は人人の三四倍も食事を採らぬと承知できなかつた。それだけに平素身體を動かすのがつらくて仕方がなく、

「どうしたらよからうか。」

と醫者に相談した。相談を受けた醫者は、

「まづ、お食事の量を減じ、つきに脂肪分を避けるのがよろしうございます。夏のことですから水をかけて召上れ。」

と答へ、

「とにかく一度お食事の様子を拜見しませう。」と申出た。

「それもよからう。」

と、彼は醫者の前で食事をしたが、水をかけた飯を七八杯食べ、魚の干物を十四五枚もぼりぼり音をさせて口に入れた。

「こんな食べかたでは、水をかけた飯でも駄目だ。」

と、さすがの醫者も逃げ出したといふ。

あるとき、兄の朝忠にしたがつて、天機を奉伺した。村上天皇は、人並みはづれた大男がお目通りに出たので、

「卿とともに見えた人は誰か。」

と、おたづねになつた。

「私の弟の朝成と申すものでございます。」

「何か得意なことでもあるか。」

「生來學問が好きで、また筆をよく吹きます。」

そこで御前演奏を命ぜられると、立派に吹いたため、

「こんな大男にも似合はぬ細かい藝がある。」

と思召し、そのちは、ときどき御前に召される光榮を得た。が、もともと神経質であり、若いときから相當な野心を、彼は持つてゐた。家柄が良いため、圓融天皇の天祿年間には中納言にまで進んだものの、彼としては参議になりたくてたまらず、競争相手である藤原伊尹（よした）の悪口をいひふらしたことも二三度にとどまらなかつた。やがて大納言に缺員ができると、彼はその地位に目をつけ、もうそのときには攝政となつてゐた伊尹の邸に向いて、その推薦を願つた。嘗て自分の悪口をいひふらしたと知つてゐる伊尹は、わざと長い間待たせたのちにやつと對面して、

「むかし、互ひに同役であつた頃、君は自分の悪口をいつて世をさまたげた。現在、君を大納言にするかしないかは、自分の胸ひとつで決定する。自分がどんな態度をとるかも大體分からう。」とはづかしめた。そのため、彼は非常に悲觀して、しばらく病の床にあつたが、やがて卒去してしまつた。

藤原朝臣良細（よした）

右大臣内麻呂の孫にあたり、父は大津といつて備前守の職にあつた。良繩は容貌といひ態度といひ、いづれも申分がなかつた。それで、當時人相を良く觀た興福寺の僧圓堂は、彼の顔をつくづくと見守りながら、

「實に良い人相だ。かならず出世をするだらう。」

といひ、その席を退いてから、親しいものに、

「ただ、壽命が長いといへぬのが残念だ。」

と、語つたといふ。

彼はまづ、仁明天皇の承和四年に、内舍人となつた。この役を勤めるものは、大體、年若く血氣壯な人人であつたため、相當品行のいかがはしいものもゐたが、彼の姿を見れば猥雑な話をびたりと止め、衣服の亂れたのを注意して直すといふ工合で、どちらかといへば畏敬されてゐた。それだけにまた上の人人から信用を受け、間もなく皇太子の御養育係となり、藏人に拔擢され、從五位、侍從にまで進んだ。

かうした間に、備前守の職に在つた父の大津が重病だといふ通知を受けた。孝心深い彼は、時

を移さず、備前に赴いて看護したいと思つたが、天皇はお許しにならなかつた。そのうちに父が死んだとの報告に接し、一時は血を吐いて氣結したが、よみがへると同時に辭職願を提出した。

それでも天皇は御嘉納あらせられず、特に優渥な勅を賜うて今までどほり宮中に出勤させ、右中辨から參議に進ませ、清和天皇の貞觀年間には、正四位下、左大辨にもなつた。

そのうちに、今度は母が病氣となつた。彼の母は、夫の死後、髪を剃つて尼となり、山城の葛野郡に眞如院といふ寺を建てて住んでゐたが、良繩は母が病氣になつたと聞くと、取るものもとりあえずにその傍に飛んで行き、一日中病床に侍して、晝夜、帯も解かず寝もせず看護した。その甲斐もなく、母もまた父の跡を追ふと、彼は當時定められてゐた喪の期間が過ぎても、なほ出仕せず、しばらくは呆然としてゐた。

數ヶ月ののち、彼は左大辨の地位で、ふたたび政務を執ることになつた。このとき、右大辨南淵年名、左中辨大江晋人、左近衛少將藤原基經など、前途有望の人人は、みな地位からいつて彼の下にあつた。そこで彼は親しい人に、

「この三人はすべて將來のある人であるのに、自分ごときものが上位にゐては出世のさまたげと

なる。」との心境をもらして、病氣を口實として職を辭し、今度もまたいろいろの方面から覬意をうながされたが、絶対に承知しなかつた。彼の推察にくるひはなく、やがて年名は左大辨、晋人は右大辨、基經は中将に進み、それぞれの才能を發揮しはじめることとなつた。彼はそれを満足さうに傍觀しつつ、宮中に出仕しないで右衛門督となり、九年には太皇太后宮大夫に進んで、翌十年五十五歳で亡くなつた。良總の性質は穩和、質素であつただけにとどまらず、君に忠、親に孝の道を完全に守つた。宮に奉仕しては文德天皇から特別の御信用を受け、地方官となつてはよく仁政をほどこし、内外ともに非難點はなく、文德天皇の御忌日には毎日かならず「法華經」を誦して、一生涯おこたらなかつた。當時の人人が、彼の忠孝を褒めたたへたのも、當然である。

藤原朝臣良房

左大臣藤原冬嗣の次男であつた。淳和天皇の天長年間に藏人、從五位となつたのをはじめとし

て、やがて從四位下、左中將に任じ、仁明天皇の承和年中には右大將、大納言、嘉祥年中には從二位、右大臣に、文德天皇の仁壽年中には正二位、齊衡年中には左大將に進み、天安元年には從一位、太政大臣にまで至つた。そればかりでなく、清和天皇の貞觀八年には、人臣でありながら最初の攝政となり、十四年九月に六十一歳で薨すると正一位を贈られ、忠仁公といふ諡を賜はつた。

かうした人物であるから、若いときから何處か人に優れた點が見えた。それに家柄もよいため嵯峨天皇の皇女源潔姫の配偶者に選ばれ、その間に生まれた明子は文德天皇の女御となつて惟仁親王を生みだてまつた。親王は生後わづかに九ヶ月で皇太子となられたが、ときに天皇は他の女御の生んだ惟喬親をまづ天位に即け、そのち惟仁親王に即位させたい思召にましました。しかも良房を憚かられて、それを御決定あらせられぬうちに崩じたまふたので、皇太子がそのまま御即位しました。これを清和天皇と申上げる。

清和天皇は、御幼少の頃から良房の邸で御成長しました關係上、登極あらせられてもその舊誼を忘れたまはず、始終尊敬の念を以て接せられた。それで良房は前後十五年間も攝政を續け、

位は人臣を極め、子孫はつきつきにと攝關の地位に就き、藤原氏の盛大の原因をつくることのできた。世に染殿大臣そめどののかみといふのは、彼のことである。

藤原朝臣基經もとつね

藤原長良の子で、叔父良房に養はれてその家を繼いだ。文徳天皇の仁壽元年に正六位上となつたのをはじめとして、左兵衛少尉、少納言、左近衛權少將、藏人頭を経て、清和天皇の貞觀五年には左中將にのぼり、六年には參議となつた。同じく八年に伴善男らが宮中の應天門を焼いた事件が起り、源信が危く連坐しようとしたとき、基經は、それが無實の罪である所以を力説して、信は罪を免かれることができた。そののち、從三位、中納言から左大臣、大納言、從二位、右大臣、攝政、太政大臣と、かぎりなく地位は進み、宇多天皇が御即位あらせられると、人臣最初の關白となつた。寛平三年に五十六歳で薨すると、朝廷では正一位を贈り、昭宣公といふ諡を賜つて、生前の功にむくゐらるるところがあつた。

彼はもともと謹嚴な男であつた。叔父の良房が養子にしたのも、彼ならば家名を汚す心配はな

いと見込んだからであつたらう。果してその見込みどほり、彼は關白にまで進んで、藤原氏繁榮の道を開いた。良房と基經との二人によつて、藤原氏の地位は、すつかり安定したといへるので、世に堀河大臣ほりかはのちかといつて評判せられたのも、無理はなかつた。

藤原時平

關白藤原基經の長男であつた。元服のときに、光孝天皇が御親らその頭に冠を加へられて、正五位を賜はつたといふ尊い記録がある。つづいて從四位下、左近衛權中將に進み、宇多天皇の御代には、右近衛大將、大納言から、左近衛大將、正三位に敘せられた。しかも彼は品行の點でよくなく、叔父の妻を奪つたなどの噂がたつたため、天皇は醍醐天皇に御位を譲りたまふとき、「時平は名門の出であり、國政はよく知つてゐるが、品行がおさまらぬ。」

と、特におぼせることがあり、權大納言菅原道眞を登用して共に國政を執らせることとなつた。そのうちにも、彼の地位はさらに進み、昌泰二年には左大臣に、延喜元年には從二位に敘せられた。けれども血氣に委せて情に奔つた政治を行ふため、理に當らぬ場合が多く、道眞はそれを

にががしく思つたが、さすが口の端に出すやうなことはなかつた。宇多上皇もまた時平の手腕を御信用あらせられず、評判のよい道眞に重大な問題を委せたまふ傾向があられたので、時平はそれに不満を持ち、つひに道眞を讒言して九州に左遷した。

天皇は、上皇ほど時平を嫌つてはゐらせられず、相當に御信用あらせられてゐた。當時の風俗は非常に贅澤で、人人は美しい衣類を競つて身につけ、たびたび出た禁令をも顧みなかつた。これについて天皇は、時平と密談あらせられてゐたが、ある日、時平は目のさめるやうな立派な朝鮮服を着て宮中に出た。天皇はそれを御覧あると、御氣色を變じて憤りたまひ、すぐに記録係を召出されて、

「朕はたびたび奢侈を禁する法令を出してゐる。それにもかかはらず左大臣は、重職にゐながら國禁を破り、華美な服を身にして出仕した。あれで人人の模範にならうか。このことをはつきりと記録せよ。」

と、おほせられた。時平はすっかり恐縮して、隨身をしりぞけ、乗物にも乗らずに自邸に歸り門を閉ち客を避けて謹慎して、一月あまり経て、やつと許された。この評判がたつと、宮中での

贅澤な風は、びたりと止んでしまつたとのことである。

かうして彼は寛平七年に正二位に叙せられ、九年に三十九歳で薨すると、正一位、太政大臣を贈られた。道眞を讒言したために、後の世の譏りを受けることが頗る多かつたが、和歌に巧みで學問も好み、延喜のはじめに勅を奉じて「三代實錄」五十卷、「延喜格」十卷を選んだ経験もあり、當時の公卿としては、むしろ傑出してゐたのである。

藤原顯忠

藤原時平の次男であつた。朱雀天皇の承平年間に参議となり、天慶年間には従三位、權中納言に敘せられ、村上天皇の天曆年間には正三位、大納言、天徳元年には近衛大將、四年には従二位右大臣に進み、康保二年、六十八歳で薨すると、正二位を贈られた。

彼の特徴は、萬事につけて質素なことであつた。邸宅も身のまはりの器具もすべて節約を守り大臣になつても、外出する場合にわづかの家來しか供とせず、客を招いても何一つ無駄な料理など出さなかつた。時平の子たちは不思議にも三十代で死ぬものが多かつたなかに、彼だけが地位

も壽命も保ち、長い間朝廷に奉仕できたのは、その人格の高さに依るとはいへ、彼が毎夜のやうに庭に出て、道眞の靈に禮拜したからだ、當時の人人は眞面目に語り合つたものである。

菅原道眞

參議菅原是善の三男であつた。幼いときから文章の才があり、十一歳のある日、父がその知人と謀つて道眞に詩を作らせると、たちまち、

月耀晴雪の如く

梅花照星に似たり

憐むべし金鏡轉じ

庭上玉房聲し。

といふ作を賦し、父を驚かせた。

清和天皇の貞觀年中に、彼は大學を出て、下野權掾となつた。この頃、彼が都良香といふものを訪れると、良香はしきりに的にむかつて弓を射てゐたが、道眞の姿を見て、

「あの男は近頃學問の方で評判が高いけれど、まさか弓術は知るまい。」と大言を、道眞ははたと考へ、

「どうです。試みにやつて見ませんか。」と、その是を以て道眞を驚かせた。道眞ははたと、とからかつた。ところが、道眞は、にっこり笑つて良香と代り、一矢で的を貫いたので、その場合にゐた人人は、まつたく驚き、感心してしまつたといふ。

さて、道眞は文章上の國家試験に及第して玄蕃助となり、小内記に任ぜられたが、母の喪のためには辭職を請ふた。やがて貞觀十六年には從五位下に叙せられ、兵部少輔となり、陽成天皇の元慶年間のはじめには、式部少輔にうつり、文章博士を兼ね、後漢書の御前講義をして從五位に叙せられ、七年には加賀權守を兼ねた。光孝天皇の御代になつて、仁和年間には讃岐守となり、正五位下に叙せられ、宇多天皇の寛平三年には、宮中に入つて、藏人頭とまでなつた。もともと藏人頭は、皇族または藤原氏といつた名家の出だけが獨專してゐた職であるから、道眞は、他の地位に轉勤を請ふたが許されず、四年には從四位下に叙せられて左京太夫大を兼ね、五年には參議となり、式部大輔、左大辨、勘解由長官を兼ね、さらに東宮亮までをも兼任した。

その翌年、朝廷では、道眞を遣唐使とし、紀長谷雄を副使に命じて唐に赴かせることとなつた。ときに唐にゐた中瓘ちゆうくわんといふ僧が、安祿山の大亂を報告したので、道眞は、遣唐使の航路に危険が多く、現在まで多數の人命が失はれてゐること、唐に大亂が起り、文化が破壊され、わが使節が赴いても實際上の利益がないことを奏上して、その中止を請うて御嘉納となつた。この年は彼が五十歳になつたため、門人一同が宴を張つて祝賀した。ときに一人の老人が祝辭と沙金とを玄關に置いたまま、名を告げずに立ち去つてしまつたといふ。彼の評判は、かうして、至るところに聞えてゐた。

七年には從三位、中納言、八年には民部卿、九年には權大納言、右近衛大將と、新しい年が來るたびに、彼の地位は進んだ。天皇が御狩に出でられようとき、諫言して御中止を願つたこともあり、地位が進むにしたがつて御信任の程度も増し、皇太子を御決定する場合にも、ただひとり道眞だけが御相談にあづかつた。その皇太子が醍醐天皇であらせられる。

宇多天皇は、世に有名な「寛平遣戒」のなかで、道眞を重用せよと、醍醐天皇に戒めてをられる。醍醐天皇も先帝のおほせごとにしたがひ、昌泰二年には、藤原時平を左大臣に、道眞を右大

臣に任じたのみにとどまらず、翌三年には、
 「左右兩大臣が國政を執つてゐたのでは、ときに統一を缺く不便がある。今後は卿がすべてを定めて奏上せよ。」
 との密勅すら賜はつた。

左大臣藤原時平は、自分が關白基經の長男でありながら、道眞に天皇の御寵愛があつまるのをつねに不満としてゐた。當時、源光、藤原定國、藤原菅根すがねらもまた、道眞のあまりな出世を嫉妬してゐたが、天皇から密諭が道眞にくだつたのを知ると我慢ができず、その女が齊世親王とくよの妃となつてゐるのを口實として、
 「道眞は陛下を廢したてまつり、自身に縁のある齊世親王を立てて、關白になりたがつてをります。」

と、密告した。時平をはじめ、光、定國らが口を揃へて申上げたので、さすがの天皇もつひにそれを信じたまひ、延喜元年正月に道眞に從二位を賜はり、急に太宰權帥に左遷してしまつた。道眞は和歌をつくつて上皇に哀訴したが、その甲斐もないと知ると、萬事をあきらめ、配所に在

つても少しも朝廷をうらみたてまつることなく、一室にこもつて讀書を主とした生活を送り、三年二月、五十九歳で薨じた。

彼に政治的な才能がどれほどあつたかは問題外としても、文章博士の家に生れただけあつて、文章は得意であり、特に漢詩では一家をなしてゐた。勃海國から來朝した使者が、彼の詩を見て「白樂天と似てゐる。」

と評したほどで、昌泰年中に勅を奉じて十二卷の詩集(菅家後集)を編輯してたてまつると、天皇は、

「朕は平生、白氏文集を愛讀してゐるが、この集に接してからは、少しも白氏文集を開かなくなつてしまつた。」

との跋文を賜はつた。また、太宰府に流されてから作つた詩をあつめて、紀長谷雄に遺つたものも相當にあつた(菅家後集)。さらに「三代實錄」五十卷、「類聚國史」二百卷の纂輯にも與つて力があり、學者としての功績はかなり大きなものがあつた。

彼が薨じて間もなく、時平や菅根がつづいて世を去り、京都に不祥事がたびたび起つたので、

世間では道眞が崇つてゐるといひふらすやうになつた。天皇もやがて事の真相を知りたまふと、延長元年には、道眞を元の地位に復して正二位を贈り、左遷の記録を全部焼かしめたまふた。のちに一條天皇の正暦四年になると、左大臣正一位を贈り、つづいて太政大臣を贈つて、その靈を慰めるところがあつた。北野の天満天神は、道眞を祀つた神として、全國に有名である。

源 經 基

貞純親王の長男であつた。親王は清和天皇の第六皇子にあられたので、世に經基を六孫王と呼んだ。

經基は武略があつたのみならず、弓が上手で馬にもよく乗り、和歌もまた巧みであつた。朱雀天皇の承平年間に武藏介となつたが、當時、下總地方に勢力をふるつてゐた平將門の様子がどうもおかしく、やがては謀叛をたくらむやうな氣がしたので、ひそかに京都に向いてその旨を報告した。しかも朝廷では御採用にならず、彼は不満ながらもふたたび關東にかへつた。しばらくして果して將門は朝廷に叛きたてまつつたので、その先見の朝廷も認められ、彼は從五位下を授

けられ、藤原忠文にしたがつて將門を征伐することになった。が、その途中で、將門が誅に服したと聞き、軍を停めて京都にもどつた。そののち、彼は太宰権少貳となり、小野好古にしたがつて四國地方を根據として瀬戸内海を荒しまはつてゐた藤原純友を討つこととなつた。純友が首を斬られ、好古が軍をかへしても、經基はその餘黨を搜索した。ときに、純友の家來であつた佐伯是行、桑原生行は、なほも殘黨をあつめて、九州方面に威をふるつてゐた。官軍は是行と日向で戦つてこれを破り大將を俘虜とした。これを知つた生行は、手勢を指揮して海部郡を攻め取らうとした。經基は自身、部下を率ゐて突撃し、つひに生行を捕へ、多くの戦利品を得た。間もなく生行は負傷のために死んだので、その首を斬り、是行と共に京都に送つた。

かうした間に、彼は、式部卿、左衛門權佐、内藏頭、兵部少輔、また筑前、信濃、美濃、但馬伊豫、武藏などの國の國守、鎮守府將軍を経て、村上天皇の天曆年中に正五位下、上野介に進み應和元年に四十五歳で死んだ。子は八人あつたが、長男の滿仲が最も有名である。

平 貞 盛

桓武天皇の皇子葛原親王の子孫で、父は常陸大掾を勤めてゐた平國香であつた。ところが、朱雀天皇の承平年間に、父の國香は、その甥にあたる平將門のために殺されてしまつた。彼は當時、左馬頭となつて京都にゐたが、父の非業な最後を知ると、どうにかして復讐したいと思ひ、地位を捨てて關東にかへり、實力を養ひながら、時の至るのを待つてゐた。貞盛の叔父に、下總介を勤めてゐた平良兼といふ人があつた。平素將門と仲が悪い、それで貞盛にむかつて、

「われわれの親族は大部分、將門のために殺され、資財はすべて掠奪されてしまつた。現在の父を殺されながら、汝は將門に屈しようとするのか。どうして力を協せて、父の仇を討つ氣にはならぬのか。」

と説きすすめた。そこで彼も叔父と共に將門と戦つたけれども、勝つことができなかつた。

「これは駄目だ。こんな工合で長い間、關東にゐたならば、自分まで同類と思はれよう。それよ

りも京都に行き、朝令を奉じて將門を討つのが一番だ。」
かう決心した貞盛は、天慶元年に、身邊の家來だけ連れて、ひそかに京都に赴かうとした。將門はそれを聞いて、信濃路まで追ひ、激戦を交へた結果、貞盛はただ一騎になつて、辛くも京都に達した。

さて、朝廷では、正式に將門征伐の件をお許しになつた。かうして貞盛がふたたび關東にあらはれたと聞いた將門は、一舉に全滅しようとする大軍を集めたが、彼は巧みに姿をかくしてしまつたため、數日間軍をどどめたのちに解散して、將門は千人ばかりを率ゐて下野に出た。それを探り知つた貞盛は、下野押領使藤原秀郷と連絡をとり、四千の兵を指揮して、將門の陣地を急襲し、逃げるのを追つて猿島の城を焼き、焰のもとで力戦して、つひに將門をほろぼしてしまつた。この功勞が天聽に達すると、彼は從五位上、右馬助を授けられ、鎮守府將軍に任ぜられ、さらにのちは、丹波、陸奥の守を経て、從四位下に叙せられた。彼の子は四人ゐたが、そのなかの維衡の子孫が、世に所謂伊勢平氏である。

藤原秀郷

左大臣魚名の子孫で、祖父の豐澤は下野守、父の村雄は下野權大掾であつた。

秀郷は田原藤太ともいひ、勇敢であると同時に、なみなみならぬ智略を持つてゐた。醍醐天皇の延喜年間の末に、ある罪によつて流罪に處せられ、のちに下野掾、押領使となり、六位に叙せられた。

やがて、朱雀天皇の天慶年間になると、平將門が下野を根據地としてそむき、關東一圓に勢力をふるつた。もともと彼は將門を憎んでゐたが、その人物を試みたいと考へ、表面は味方をする様子で、將門の城に出向き、謁見を請ふた。ちやうど髪をとかしてゐた將門は、秀郷が味方となり來たと聞いて、悦びのあまり、洗ひ髪のまままで對面したので、

「謀反をやるやうな男が、こんな落付きのない態度でどうなるものか。これは簡単に征伐できる。」

と彼は考へ、そこで平貞盛と力を協せて將門を攻め、矢にあたつて馬から墜ちるところを、首

を兼ねてしまった。この功に依つて、彼は朝廷から従四位下を授けられ、しばらくしてから下野守、武藏守となり、鎮守府將軍に任ぜられた。

——(上巻・終)——

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '高須芳次郎' and '小川菊松'）

文藝春秋 高須芳次郎著

(出文協承認)
7120042號

昭和十七年十二月五日 初版印刷
昭和十七年十二月十日 初版發行 (三〇〇〇部)

物語大日本史上巻

◎ (定價二圓八十錢)

高須芳次郎

小川菊松

小林浩齊

株式會社日本印刷局

(東京二〇九)

發行所

東京市神田區錦町一丁目五番地

株式會社誠文堂新光社

電話 會社番號一四五〇六番
神田(25) 二二二六、二二二七番
編輯口座東京六二九四番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

著 郎 次 芳 須 高 士 博 學 文

★日本精神作興の書!

大日本史に
現はれたる

尊皇精神

A5判
三六五頁

定價三・五〇
送料〇・三〇〇

水戸學徒列傳

B6判
三六八頁

定價二・〇〇
送料〇・二〇〇

藤田東湖傳

B6判
六〇〇頁

定價二・八〇
送料〇・二〇〇

文堂澤水編

新友會編日本國體論

小 林 新 著

——近 刊——

高須芳次郎著

物語大日本史 中卷

B6判 定價二・五〇
送料〇・二〇〇

昭和十一年十二月十日 發行
昭和十一年十二月五日 印刷

954
21

終

